

第四回講演速記録

(明治四十五年四月二十三日 第五回委員会に於て)

◎維新前後経歴談

伯爵板垣退助

今日私がお話を致しますことは、洵に入組んで居りますので、其關係を先づお話を致して置いて、さうして本文に入つた方が能く解りませうかと思ひます、それで其中心になりますのが容堂でございますから、自ら容堂の人となりもお話を致し、それから各党派の關係をお話して、さうして事實にそれを照して説明を致すやうにしたいと思ひます。

容堂といふ人は洵に他に誤解せられて居ることも多いやうに存じます、又之を辯護した人も少ないやうでございます、洵に遺憾に思うて居ります、私は容堂に餘り用ゐられませず、多く後藤君が用ひられて居りました、其私が茲に容堂を辯護致

維新前後経歴談

一

生々しい歴史を伝え読み易い

明治維新実録談中の白眉！

維新史料編纂會講演速記録

全三卷

続日本史籍協會叢書

限定二百部復刻



マツノ書店

目次

第一巻

- 幕末の外交 田辺太一
 - ①鎖港談判及遣使節願末 ②巴里日本公使館書記官在勤中の見聞 ③小笠原島視察 ④堀織部正自裁の真相
 - 幕末外交の中心人物が語る迫真の速記録。
- 徳川民部大輔に随行渡欧中の見聞 渋沢栄一
 - ・パリ万国博覧会に参加した幕府一行の顛末。
- 但馬一挙の真相 北垣國道
 - ・但馬の農兵を組織し生野の拳兵に参加した顛末。
- 維新前後経歴談 板垣退助
 - ・維新前後の土佐藩の内部事情。西郷と提携の秘話も。
- 桑名開城の顛末 加太邦憲
 - ・米沢・福島・仙台から函館にまで赴いた話など。
- 桑名藩京都所司代中の事情 加太邦憲
 - ・旧桑名藩士が、一橋慶喜・会津藩と共に幕末京都の幕府 勢力を代表した桑名藩の動向を語る。
- ①松平越中守定敬京都所司代となりし事 ②所司代動向の事 ③京都警備の事 ④京都火防の事 ⑤浮浪の徒捕手の事(池田屋事件) ⑥長久寺關を侵せし事 ⑦桑名藩長州征伐に出兵せざりし事 ⑧戦争に用ゐし武器服装の事 ⑨禁門の事 ⑩任官感状賜品等の事 ⑪武田耕雲齋兵を率ゐて上京の事 ⑫家茂將軍薨去慶喜公將軍職に就かれし事 ⑬附 孝明天皇崩御の事 ⑭慶喜公大政返上軍職辞退の事 ⑮桑名藩兵制の事 ⑯桑名藩所司代中外交に当りし人々の事

第二巻

- 維新の際に於ける芸藩の態度及内情 船越 衛
 - ・幕府・長州藩の間で板挟みになった芸州藩の維新前夜を旧藩士が語る。土佐藩よりも早かった大政返上の建白も紹介する。
- 徳川慶喜一橋家相続の事情 江間政発
 - ・旧桑名藩士が三家・三卿の沿革から、慶喜の一橋家相続の顛末を語る。
- 生麦事件の顛末 小牧昌業
 - ・維新史料編纂委員に任せられた旧薩摩藩士が語る、生麦事件。
- 文久三年生麦事件償金の顛末 江間政発
 - ・旧桑名藩士が、生麦事件賠償金支払いに直接関係した者より聴取した話を紹介。
- 文久三年長州兵馬関に於て薩州商船撃沈事件 船越 衛
 - ・文久三年十二月、関門海峡を通航中の薩摩藩船が長州藩に砲撃された事件。芸州藩領の綿を積んでいたため、事件に関与した旧芸州藩士が語る。

元治元年武田耕雲齋等西上の際越前方面へ出張の顛末 遊沢喜作

鳥羽伏見開戦当時肥後藩拳止 小橋元雄

水戸烈公蒙謎の事情 江間政発

橋本左内の事情 加藤 斌

長井雅楽の事蹟 中原邦平

島津久光と島津斉彬との関係及び文久二年久光上京の趣意 菊池則常

戊辰の役に於ける米沢藩帰順の顛末 船越 衛

丙辰丸成破の盟約 中原邦平

文久三年長州兵馬関に於て薩州商船撃沈事件に関する薩州藩交渉顛末 阿多 澆

池田徳太郎事歴 船越 衛

文久三年八月政変前後の事情 質問者 江間政発 応答者 蜂須賀茂詔

松平定信対外意見一斑 江間政発

幕府使番中根市之丞長州に於て遭難の始末 江間政発

中根市之丞遭難の地 中原邦平

利家から資金を得て墓碑を建て、法要を行った経緯。明治維新の際に於ける朝鮮論 船越 衛

附/大村兵部大輔の兵制改革意見 朝鮮に兵を出すか否かをめぐる木戸や大村の真意。大村に師事した元芸州藩士が語る。

松平定信入閣当時の事情 江間政発

明治庚午徳島藩騒擾始末 新居敦二郎

御即位礼と大嘗祭 池辺義家

高野長英宇和島潜伏中の事実 村松恒一郎

維新当時の実歴 阪井重季

故井上侯追懐談 中原邦平

高杉晋作の事蹟 中原邦平

明治四年若倉全権大使欧米巡遊に就て 尾崎三良

会津若松城開城の顛末 黒河内良

薩長連合の発端に就て 黒河内良

戊辰北越従軍談 谷国之助

熊本籠城の実況 出石猷彦

西郷南洲翁辞世の詩句に就て 阿多 澆

最近も話題になった西郷の「辞世」につき、自分だけが知るといふ秘話を披露。古くから人々の関心事だったことも分かる。

(「二」から始まる文章はパンフ用の解説です。)



今回の復刻版の装幀です (デザイン・毛利一枝)

■本書は明治45年に編纂を開始。復刻版は昭和52年に東京大学出版会より刊行されています。■3年前、小社の「復刻希望アンケート」では「買いたい本」の第1位、「持っていない本」の第2位でした。古書価格は以前3万円以上でしたが、最近はその店にもありません。早く復刻して『史談会速記録』全45巻復刻につなげるつもりだったのですが、少し弱気になってそのまま延期し、今日に至りました。■「並製」につきましては二年前『防長回天史』で初めてこの製本方式を採用し、その後は便利さを高められるばかりで苦情は皆無です。小社独自の製本は、たとえ本の背中をへの字に曲げても綴じ糸は切れず、むしろ開き易くなるばかり。函がないため扱いも簡単。「とても丈夫で使い易い」との評価を高めております。

■体 裁 全三巻セット
 A5判並製 計一三三〇頁
 ■特 価 一万八千円(税共・〒別)
 ■予約特価 一万五千円(税・〒共)
 ■特価締切 23年3月20日
 ■発 売 23年4月下旬

限定二百部

▼書店不卸 ▼締切厳守 ▼返本OK
 山口県周南市銀座2-13
 ☎〇八三四〇二九五 マツノ書店
 URL http://www.matuno.com

●「申込ハガキ」にあるセット特価をご利用下さい。



歴史の不発弾の魅力

秩博物館特別学芸員 一坂 太郎

当たり前のことだが、歴史研究は対象とする時代が現代に近ければ近いほど、ある種の生々しさが付きまとう。しかし、その印象も僅かな世代の差により、随分と異なる場合があるようだ。

私がこの道に足を踏み込んだ二十余年前は、明治生まれのお年寄りが、そこかしこに健在で、やれ、乃木希典があの学校の来たとか、井上馨が大演説をぶったせいで日射病になって倒れたとか、そういう話を延々と聞かせてくれた。子供のころの他愛もない思い出話なのだが、乃木や井上の本物を見たというだけに物凄く魅力的だった。お陰で明治維新が何かと身近に感じられたものである。ただ、こうした話を聞くことが出来たのは、私の世代が最後のようだ。

私よりも年少の研究者になると、そうした経験がほとんど無い。一方、年長の研究者は意識する、しないにかかわらず、もっと面白い話を聞いておられるはずである。それが、それぞれの明治維新観に何らかの影響を及ぼしていると思うのだが。だから後進のために

○薩長連合の發端に就て

黒河内 良

今日は折角お招きに預りましたから、何か維新史に關係あることを申し上げませう、それは薩長の連合の本であり、書いた物で承はつて居りますが、さういふ書いた物になく、阪本龍馬が専ら此事を周旋した様になつて居りますが、さういふ書いた物になく、人も知らぬ話がある、これは古松簡二といふ久留米の俊傑と、私は一所に半に居りましたので其の半中で聞いた話であり、古松簡二は、高杉久阪兩先生とは最も別態で始終往來して居つた、京都で古松等の有志の間で、どうしても大勢を爲す根本を造るには薩長をして和合せしめなければならぬといふ議論が一定した、然らば高杉を説くには誰が宜からうかといふことになつて古松簡二が其選に當つた、それから神戸から船に乗って船中で水戸人で齋藤佐次右衛門といふ者と乗合になつた齋藤にあなた何處へ入つしやると尋ますと、私は下關に行つて高杉に遇

薩長連合の發端に就て

薩長連合の發端に就て

うのだと申します、高杉に遇ひに入らしやるのでありますれば、其人は居りませぬよ、私も實は遇ひに行きます處であります、何處に居ります、高杉は多度津に居ります、それは宜いことを伺つた、それではあなたと一所に、高杉の居る所に行きませう、それではお供を願ひませうと、それで二人で多度津へ行つた處が其所に居らず、琴平に居ると聞き、琴平に行き高杉は麴屋菊五郎と變名して居る所に尋行ました時、女の著る赤い衣裳を着て、藝者に月代を剃らせて居つた、それから其處へ上つて古松簡二は、元から友人の間の事だから高杉が「ヤア来たか」と言つた、水戸の齋藤は初對面の事だから、古松が紹介をした相當の挨拶をして、それから齋藤が申すに、御藩の柱と薩摩の西郷とは私の聞く所では、大體一致して居る、然るに別々の道をお歩きになるのは實に天下の爲に不利な處である、下々の者は兎も角先生は必ず御同意と私にお遇ひ申さぬ先から思つて居つた、薩摩と手をお握りにならんことを國家の爲に希望する、といふ様な話であつた、さうであります、其時高杉の話が、これは私が古松から聞いた儘をお話しますので、少し高杉の話では、薩摩に對する方の悪口がある様でありますけれども、それは御遠慮なくお話しする、高杉が申すに、他藩のお方

内容見本

(65%縮小)

も、自ら体験された生々しさを、少しでも伝えておいていただきたいと思います。このたびマツノ書店から復刻される『維新史料編纂会講演速記録』は、明治の終わりにから大正のはじめにかけて集められた談話だ。田辺太一、北垣国道、板垣退助、船越衛、尾崎三良らといった明治維新に直接関与した者と、次の世代である中原邦平らの談話速記録が交じっている。維新から半世紀が経つており、過渡期だったのだから。そのような時期に、これだけの談話を集めてくれたことに、まずは感謝したい。

この本を私は、大学生のころ興味深く読んだ。手にしたきつかけは、自分の先祖がかかわったある事件につき、ゆかりの人物が語っていたからだ。読み進めると、八十年という歳月を越え、その人物が眼前に現れたかのような錯覚におちいった。どんな喋り方をし、どんな思いでいたかが分かり感無量だった。当時の聴取者と感激を共有出来る。それが、速記録の大きな魅力のひとつだろう。

そのころ、他に面白いと思つたのが黒河内良の「薩長連合の發端に就て」。黒河内は、一所に入牢していた久留米の古松簡二から聞いたという話を披露している。古松は水戸の齋藤佐次右衛門と共に、四国琴平に亡命中の長州藩士高杉晋作を訪ね、薩摩藩との和解を説

く。ところが、晋作は二人の浪人の話には乗らなかつた。薩摩藩がその気なら、ちゃんとした使者を寄越して来ると考えたからだ。ただそれだけの逸話で、いかにもプライドが高い晋作らしいが、管見の晋作伝記などには紹介されていない。

周知のとおり同じころ、土佐の坂本龍馬が長州下関に桂小五郎を訪ね、薩摩藩との和解を説いている。晋作と違い、桂はこの話に乗つてしまふのだが、西郷は下関に来なかつた。こちらの逸話は、幕末史の一場面としてさまざまな文献で紹介されている。さらに劇的に小説化、映像化されて人々を酔わす。

だが、龍馬以外にも水面下で薩長間を暗躍していた浪人たちがいたという回顧談は、私にとり新鮮な驚きだった。埋没していた不発弾が、地上に引つ張り出されたような感じである。これを読んだ時、表面上に残る歴史とは何なのかを、考えさせられたことを憶えている。しよせん人間が紡いでゆく歴史の陰には、あちらこちらに不発弾が転がっているのではないか。以来、こうした回顧談を読みながら、歴史の中の不発弾を探るのが楽しみになつた。

龍馬が晋作の所に、古松が桂の所に行つていたら、昨年の大河ドラマの主人公はあるいは違つていたかも知れない。

なら私は申さぬ、あなたが水戸の藩と仰しやるからお話しする、水戸は我々の敬慕して居る義公以来烈公に至る迄實に忠義といふ義を重ずる御藩のあなたのお話としては實に案外に思ふ斯ういふ高杉の話で、それはどういふ譯だ、武士が義といふことを眼中に置かずしては何事も出来ぬものではない、實に其通り、初め我が長は薩と相約して共に國家の事をした然るに今日既に會奸薩賊と言て居るではな

い、薩が會津と結んで我が長を制する、我れより背かずして彼れより背いて居る、これは天下の認識することである、今日の状況はどうであるか、今日の状況は御覽の通り、薩は薩々として旭の昇るが如く我が長は今や失意の地位に居る、彼れより來つて和を請ふならば格別我れより膝を屈して薩に和を請ふことは、此の高杉の眼の黒い内はいけません、斯ういふ話であつた、齋藤といふ人は、至つて温厚な人であつて其説を打返すだけの力もない、これから外の宿屋に行つて泊つた古松は跡に殘つて寢轉んで實は僕も今の齋藤と同様に、薩長の和合の事を君に話に來た先刻の君の話は表面より言へば尤もの理屈だが實際より云へば君が平常の識見に似合ざる論で、今日の日本の大局より見て貰はねばならぬ高杉笑ひながら、君馬關と云



『維新史料編纂会講演速記録』の魅力

広島大学大学院教授 二宅 紹宣

実歴談の魅力は、体験者ならではの臨場感が、直接伝わってくることであろう。そこには、文書史料からはうかがえない、生き生きとした歴史が脈打っている。もとより話者の誇張や記憶違いには、注意を要するが、それを差し引いたとしても、実歴談からは、様々な有益な情報をくみ取ることができる。

本書は、明治維新の実歴談中の白眉である。収録されているのは、明治末から大正初めにかけて彰明会、史談会、温知会において行われた講演速記四二本。その中から、特に興味深いものについて紹介してみよう。

板垣退助「維新前後経歴談」は、幕末の複雑な政治過程をきわめて明解に語っている。そこには、政治的配慮というオブラードに包んで記述されることが多く、真意がつかみにくい文書史料の世界とは異なり、複雑な人間関係を生き抜いた実感がこもっている。

慶応三年（二八六七）の土佐藩は、党派が入り乱れて複雑な動きをする。五月、板垣は、京都で薩摩藩と討幕挙兵を約束し、西郷隆盛も同意したと語っている。そこで板垣が土佐に帰って軍隊編制をしていると、薩土盟約を結んだ後藤象二郎が帰り、大政奉還の建言を山内容堂へ行い、これが採用されて、板垣は参政をやめさせられた。討幕を決断している西郷が、なぜ大政奉還に賛成したかについての西郷の考えは、鹿児島の方も最後の決心が出来ないものに見え、先ず大政奉還に一つの階梯を踏んだほうがやり易いので、一時的に同意したというものであったと証言している。これは中岡慎太郎も同様であった。

ただ、坂本龍馬は、大政奉還は自分の立案なので、これは行われると見ていた。そこで中岡は、坂本の挙動に注意すべしと、同志に告げていた。その中で、十一月十五日、坂本と中岡は暗殺されるが、陸奥宗光などは、初めは「坂本と中岡がやり合って、刺し違えた」と思ったという話を伝えている。これも、当時の実感として重要であり、坂本の政治的位置を知ることができる。

坂本の慶応三年の政治思想については、意外と史料が少なく、謎に包まれている。解明すべき重要課題であるが、その解明のために、これらの実感は、大いに参考となる。

坂本については、尾崎三良「維新前実歴談（七卿落の事歴談）」も興味深い。尾崎は、三条実美に仕え、その行動に従ったことにより、七卿の周辺の動きが生き生きと語られている。それとともに、慶応三年、見聞を広めるため長崎に行つてからの話が、精彩に富んでいる。長崎で坂本から誘われて、後藤象二郎を助けるために、京都に上ることになった。坂本らの一行は、途中土佐に寄つて、十月七八日頃、京都に入り、醤油屋（近江屋）に一緒に旅宿していた。大政奉還が成り、これからの政治をどうするか坂本と話し合い、職制草案を作つたことを語っている。細かい内容は、直接本書にあたつてもらうほかないが、文書史料と突き合わせることで、坂本の政治思想がより鮮明になるであろう。

田辺太一「幕末の外交」は、幕府の外交畑で実務の第一線に当たっていた者らしく、リアルな内容が含まれている。文久三年から元治元年（二八三〇）の横浜鎖港談判については、その考えがどこから起こったかについて、一橋慶喜の腹から生まれたとしている。そして、フランスへ渡つてからの談判において、フランスの外務大臣が、七〇八回も会つて幕府の言い分を聞いてくれたと話している。ヨーロッパ情勢が混沌とする中、多忙の外務大臣が時間を割いて談判に応じるのは異例であり、外交の実感として重要である。そして、その意図が、幕府を援助することによって緊密な関係を築こうとすることにあつたとしている。このことは、以後の幕府とフランスの関係を見る上でも参考になる。

その他、慶応三年（二八六七）のパリ万国博覧会の時、日本からの出品に、幕府とともに薩摩藩が出品したが、「薩摩太守政府」という名札を付けた話を語っている。その頃、諸藩は、政府と呼んでいたため、政府という名札となった。これがそのままフランス語に翻訳され、フランスでは、日本国には二〇〇諸侯があり、おのおのその国の政治を行つてるように受け止められた。藩庁を政府と呼んでいたことは、長州藩関係の速記録にもしばしば見られるが、言葉が国際問題にまで波及した話は、体験者ならではの実感であろう。

以上は、本書の内容の一端を紹介したに過ぎないが、他は直接その速記録に触れて、話者の口ぶりとともに味わっていただきたい。話は、それ自体としても面白いし、文書史料による研究を補う上でも参考になること大である。本書を推薦する所以である。